

兪鎮午の日本語小説について

白 川 春 子

目 次

1. はじめに
2. 作品について
 - 2-1 「夏」
 - 2-2 「汽車の中」
 - 2-3 「福男伊」
 - 2-4 「南谷先生」
 - 2-5 「祖父の鉄屑」
3. おわりに

1. はじめに

兪鎮午 (1906~1987) は、朝鮮近代文学の代表的な知識人作家である。

開化派の政治家として有名な兪吉濬の一門で、父親は第 1 回官費日本留学生出身の法学者という生まれながらのエリートであった。

彼は京城帝大予科時代、日本語文の校友会誌《清涼》に、日本語で翻訳詩や評論「ミューズを尋ねて」(《清涼》2号、1925年12月)を発表する¹⁾。

私や私と同じ年頃の人たち(普通学校1学年の時から本格的に日本語教育を受けた人たちは)、日本留学に行かなかったが、初めから日本語を通じて文学の勉強をした…(中略)…最初に書かれた私の文学作品は、「ミューズを尋ねて」という日本語で書かれたエッセイだった。…(中略)…そのような文章を書いたのは、漢文の勉強をして漢詩を書いてみるように、日本語を通じて文学を勉強したので、日本語で作品を書いてみたかっただけだった²⁾。

兪鎮午は後にこう述べているが、彼が日本語を通じて文学を学び、彼の最初の文学作品が日本語で書かれたということは、兪鎮午の作品を研究する上

で、大変、重要なことであると言えよう。

京城帝大法文学部法学科に入学した兪鎮午は、在学中の1927年、「復讐」、「スリ」、「把握」などの作品を《朝鮮之光》に発表し、作家としての活動を始める。そして同伴者作家として活躍する一方、1929年、京城帝大卒業と同時に同大学刑法研究室の助手となり、31年には京城帝大予科講師、32年には普成専門学校講師、39年には同校法科科長となって法学者としても着実に歩んでいく。

また、当初、同伴者作家とみなされていた兪鎮午であったが、やがて市井の庶民の生活を描いた世態小説などを書くようになる。そして植民地末期になると日本語で作品を書かざるをえなくなり、いくつかの日本語小説とかなりの数に上る評論・随筆等を残している³⁾。

これらの日本語作品は、いわゆる「親日文学」としてこれまであまり研究の対象とされてこなかったが⁴⁾、日本の植民地下の朝鮮を生きた作家・兪鎮午を理解する上で、これらの作品を取り上げて論じることが必要であると思われる。

本稿では、兪鎮午の日本語作品の中で、特に日本語小説に焦点をあてて考察を試みたい。

2. 作品について

これまでに確認されている兪鎮午の日本語小説(翻訳を除く)は、全部で5編であるが、本稿で考察対象とするこれらの作品を発表年代順に示すと、次のようである。

1. 「夏」《文芸》1940年7月
2. 「汽車の中」《国民総力》1941年1月
3. 「福男伊」《週刊朝日》1941年5月18日
4. 「南谷先生」《国民文学》1942年1月、『朝鮮国民文学集』1943年4月、所収

5. 「祖父の鉄屑」《国民総力》1944年3月、『半島作家短篇集』1944年5月、所収

これら5編について以下、個別に検討していくことにする。

2-1 「夏」

この作品が掲載された《文芸》誌は、日本で発行されていた文芸雑誌である。満州事変を機に思想弾圧が強化され、プロレタリア文学の退潮にともない訪れた〈文芸復興〉の高まりの中で、1933年11月に改造社によって創刊された《文芸》は、1944年7月に廃刊になるまで最も権威ある商業文芸誌として、特に海外文学の紹介にも力を注いだ。作品「夏」が掲載された1940年7月号は〈朝鮮文学特輯〉で、兪鎮午の「夏」とともに、張赫宙の「欲心疑心」、李孝石の「ほのかな光」、金史良の「草深し」というように4編の短編小説が載っている。

兪鎮午は、この日本語小説「夏」について「1940年、日本《文芸》誌の要請で私は「夏」を…（中略）…同誌に寄稿した」と述べ、「自ら進んで」書いたと後に回想している⁵⁾。

この点について布袋敏博氏は次のように指摘している。

『文芸』40年7月号に掲載された「夏」も、時期は既に日本語の使用が強制され始めた時期に書かれたものではあるが、これも「自ら進んで」書いた作品であると述べている点は見逃せない。…（中略）…1939年～1940年は、日本で一種の朝鮮ブームが起きた時期で、もちろんそれは自然発生的というよりは意識的に作り出されたものであった。この『文芸』誌の特集も、そうした潮流に乗って企画されたものであるが、兪鎮午にとっては、盟友の李孝石や、早くから日本で活躍している張赫宙、それに若手のホープとして日本文壇で華やかに活躍を始めていた金史良などとともに、日本語によって腕を競い合う場であったことが、上の回想から知ることが出来る⁶⁾。

それでは兪鎮午が「自ら進んで」書いたという日本語小説「夏」とはどのような作品であるのか見ていきたい。

ソウル都の名家の奴僕として世間知らずに暮らしてきた尹福童は、主人の宋判書臺監が亡くなると、百圓ばかりの手切れ金を握らされて屋敷を追われるが、商売もうまくいかず、日稼人夫となって冬の郊外の土幕⁷⁾部落に落ちのびて来る。もともと貞操観念が乏しくて奔放な妻の順伊は、落ちぶれて病気がちの福童に愛想を尽かし、この土幕部落で力を持つ、蛇売りでごろつきの頭目の鄭百萬と関係するようになるが、福童は堪えるしかなかった。やがて春になり、田舎で春窮期を越せない廣岩^{ソフンバク}の若者が若い妻を連れてこの土幕部落にやって来ると、福童はいろいろ面倒を見てやる。そして夏のある日、鄭百萬と廣岩^{ソフンバク}の女との関係を順伊^{スウニ}に知らされた福童は、鄭に対する憎しみが沸き上がり、現場に駆けつけて鄭に飛びかかるが、力の弱い福童は逆に鎌で刺されて倒れてしまう。

以上が「夏」のあらすじであるが、この作品を読んでまず気が付くことは、ルビによる朝鮮語の表記である。具体的には「順伊」^{スウニ}、「舎音」^{マルム}（農場管理人）、「擔具」^{チゲ}、「床奴」^{サンノ}（小間使ひ）、「行下錢」^{ハンア}（祝儀金）、「木盤」^{モクパン}、「擔軍」^{チゲ}、「温突」^{オンドル}、「漬物」^{キムチヤン}、「周衣」^{ツルマキ}、「蛇売り」^{カクチェンイ}、「裳」^{チマ}、「上衣」^{チヨゴリ}、「執事」^{チヨンガギ}、「娼婦」^{カルゴ}、「腰巾着」^{ヨップナン}、「絹」^{サムベル}、「廣岩」^{ソフンバク}、「麦嶺」^{ボリコゲ}、「都」^{ソウル}、「上衣」^{チヨクサム}、「麻の短袴」^{ベチヤンパンイ}などである。このように22もの語について、ルビによって朝鮮語の音が示されている。一種の朝鮮ブームの中で企画された《文芸》誌の〈朝鮮文学特輯〉に掲載される作品ゆえに、作者は日本の読者に対してことさらに朝鮮的なものを強調する作品を執筆したとも言えよう。が、また同時に、「自ら進んで」書いたと言いながらも、朝鮮語での執筆が制限されていく中で、日本語で作品を書くという行為を逆手に取り、日本の読者に向けてルビという形で一部ではあるが朝鮮語を表記し、朝鮮的なものを訴えようとしたとも言えるのではないだろうか。この点について金允植氏は、筆者の考えとは多少ニュアンスは異なるが、「福童は順伊の裳の裾を掴んだ」という文章を引用して次のように述べている。

"福童は順伊の裳の裾を掴んだ" というような表現を通して、朝鮮的特性を日本の読者に顕にして見せることで、日本語で創作されはしたが、日本文学ではありえないことを明らかにする作家の創

作戦略がこのようにはっきりする⁸⁾。

ところで筆者は以前、兪鎮午の代表作である「金講師とT教授」について、初出の《新東亜》版(1935.1. 朝鮮語)と、日本の文芸雑誌《文学案内》に掲載された日本語版(1937.2. 作者自訳)の比較・検討を試みたことがある⁹⁾。その結果、後者は全面的に書き改められていることが確認され、両者を比較してみると後者に加筆部分が多く見られ、その加筆部分に注目すると植民地下の朝鮮を強調するような描写が散見された¹⁰⁾。そしてそれは作者、兪鎮午が、自ら作品「金講師とT教授」を訳出するにあたり、日本の読者に対して、日本の植民地支配の現実を訴え、暗に批判しようとしたためではなかったかと推測されたのである。そして作品「夏」にもやはり次のような植民地、朝鮮の現実を示すような描写が見られるのは、非常に興味深い。

土幕は不治の皮膚病のやうに、この街の外郭に巢喰つてゐるのであつた。十年前、三十幾萬といはれてゐたこの街の人口は、五六年前にはもう七十萬を突破し、「大陸兵站基地」の心臓部といはれるやうになつてからは、更に加速度的に膨張して行つた。膨大な都市計画案が樹てられ、大規模な区画整理が始められたが、それに歩調を合わせるやうにして、到る処の空地には簇々と土幕部落が出来て行つた。区画整理の手が延びるにつれて、不潔なこれらの部落はどしどし取壊されたが、しかし取壊されても取壊されても、その先々に、新しい土幕部落が出来て行くのである¹¹⁾。

この作品は、貧しい土幕民の生活を描いたものであるが、その背景に、日本の「大陸兵站基地」としての朝鮮という現実があることをはっきりと示していることがわかる。

また冬の間には体が弱り、人夫仕事ができなくなった福童は、春になると京城の街に出かけて花売りをするようになるのだが、そこでの描写も注目に値する。

福童は花売りを始めてゐた。…(中略)…温室の花を買揃へて、色美しく擔具チヂの上に飾り、夕食後の散歩に人の出盛る頃、和信デパートの前に擔具

を下して、買手を待つのである。…(中略)…買手は大抵、花のように着飾つた、断髪洋装の娘たちであつた。異邦人のやうに福童にはみえるのであるが、…(中略)…紛れもない同胞である。…(中略)…午前一時になると、まるで映画のはね時のやうに、大通は脂粉の女を引連れた酔客で溢れるのである。こちら一帯の裏街に巢喰つてゐる歓楽場が、一斉に看板を下すからだ。そして酔客の中には、百合の花一本で、五十錢札を惜気もなくくれてしまふ人も、たまにはゐるのである¹²⁾。

このように、植民地下の近代化の中で、屋敷を追われ、土幕民として生きざるをえなくなった福童のような人々がいる一方で、福童の目には異邦人のやうに映る花のように着飾つた同胞の娘たちや享樂的に暮らす人々がいることが、福童の目を通して描かれているのである。

しかしこの作品の基調をなすのは、あくまでも福童たち土幕民の生きざまでである。そして妻・順伊スツミの不貞に堪え、貧しく苦しい日々を送る福童は、ついに怒りを爆発させる。

不思議にぐらぐらと、福童の肚の中には熱湯のやうに沸き立つものがあつた。理窟では動機を説明しきれない不可解な激情——ただ一念、一撃の下に鄭をやつつけてやらうといふ恐ろしい憎しみの焰であつた¹³⁾。

そして福童は、鄭百萬に命がけで挑むが、逆に鎌で一刀のもとに倒されてしまうのであつた。作者は、貧しい土幕民の生活を淡々と描いた後、虐げられ続ける者の命がけの激情を生々しく描いてみせ、最後に次のような表現で作品を終えている。

が、これももう昔物語である。その頃は、区画整理の手は、まだ川上のコンクリートの橋のところまでしか来てゐなかつたが、八月の終り頃には、ここの土幕部落も跡方もなく取払はれてしまつた。そして初霜が降りる頃には、もう大方、工事も終つて、両岸には、白い石垣が遥か川下まで一直線に築かれ、ところどころ植込も新しい住宅すら建つてゐた。五ヶ月前のあの惨劇は、誰かの悪夢だつたのだらうか¹⁴⁾。

金允植氏は、この作品の最後の部分を引用して次のように述べている。

無心の自然秩序の中に暮らしているはかない人生が、これによって逆に鋭く浮き彫りにされると同時に、<兵站基地>としての植民地的現実が、より鮮やかに浮かび上がった¹⁵⁾。

作者・兪鎮午は、季節の移ろいの中で、土幕民という最下層の人々の視点から植民地朝鮮を描いてみせ、すべての現実（植民地という現実も含む）が、時の流れの中にある「移ろう」ものであることを語ろうとしたのではないだろうか。

2-2 「汽車の中」

この作品は、1941年1月、《国民総力》誌に掲載された。《国民総力》は朝鮮で発行されていた雑誌である。1938年7月7日に発足した国民精神総動員朝鮮聯盟の機関誌で、1939年6月に《総動員》として創刊、1940年11月号から《国民総力》と改題された¹⁶⁾。

ところで当時、朝鮮を代表する文人の一人であった兪鎮午は、さまざまな親日団体と関わりを持たざるをえなくなっていく。1939年10月、朝鮮総督府学務局長、塩原時三郎の肝煎りで結成された「朝鮮文人協会」の発起人（代表・李光洙）に名を連ね¹⁷⁾、幹事にもなっている¹⁸⁾。また1940年12月、国民総力朝鮮聯盟（前身は国民精神総動員朝鮮聯盟）の文化部文化委員となる¹⁹⁾。作品「汽車の中」は、この直後、この団体の機関誌である《国民総力》に発表されたのである。そして1943年4月、朝鮮文人協会、朝鮮俳句作家協会、朝鮮川柳協会、国民詩歌聯盟の4団体が発展的に解散して発足した朝鮮文人報国会の常務理事となる²⁰⁾。

この当時のことについて兪鎮午は、先にも引用した自らの「作品解説」の中で次のように述べている。

1941年、所謂、大東亜戦争（太平洋戦争）が勃発するや、やっと咲き始めていた我国の新文学は一朝にして暴風雨にあったようなことになった。1941年、《文章》は廃刊され、《人文評論》は日語誌《国民文学》に転換した。私はその時期にも

まだ命脈を維持していた朝鮮語の雑誌に「カマ」・「食母餘」・「金浦アジュモニ」等を書いたが、日本語でも「南谷先生」と「汽車の中」の二つの作品を書いた。前に自ら進んで「ミューズを尋ねて」や「夏」を書いた時とは違って、今度は強要されて書くものであるから、ひどく不愉快であったことは言うまでもない。しかしそれよりもみっともなく恥ずかしかったことは、私も日帝によって組織された<朝鮮文人報国会>に動員されて、数回、講演に出ざるをえなかったことである²¹⁾。

このように作品「汽車の中」は、時局の緊迫化の中で、「強要されて書」いた日本語小説であったと兪鎮午は後に語っているのであるが、次にその作品内容を見ていくことにする。

主人公である日本人女性、美津子は、玄界灘を渡って初めて朝鮮の地を訪れる。召集されて入営する従兄に会いに、京城にいる叔母を訪ねるためだった。そして船を降りて特急列車に乗り込んだ美津子は、偶然、向いの席に座った朝鮮人の青年画家との会話を通して、朝鮮への理解を深めていくという話である。

この作品でまず注目されるのは、美津子の朝鮮に対する先入観が、東京の美津子の家に入入りする朝鮮人の李によってもたらされたという点である。

何時とはまじに美津子はまた東京の李の話の思ひ出してゐた。李はよく美津子の父と夜晩くまで雑談に耽つたりするのだつたが、たまたま朝鮮の話が出たりすると、いつも口を極めて罵るのだつた。我利我利で恩知らずで汚くて怠けもので、その癖依頼心だけは人一倍強いなどと、李はいつも故郷の人々の悪口をいつた。襖を隔てて李の話を聞きながら、美津子は、自分の故郷の人のことだもの、そんなにまで云はなくてもよささうなのに、と却つて反感を覚えたことすらあつたのだが、しかしそれによつて何時とはなしに朝鮮についてよくない印象を植えつけられたのだつた。李だけは選ばれた特殊の人として……²²⁾。

このように、朝鮮人に対する批判的な表現が、朝鮮を離れ日本社会に溶け込んで暮らしている「選ば

れた特殊」な朝鮮人の口を通して語られている点は興味深い。

次に注目されるのは、美津子が汽車の中で読むKの「新聖書講義」についての部分である。

先月はユダの変節のくだりだったが、今月のはその後日譚だんに関する論議だった。何時ものことながらK氏の論理は、鋭くて、独特の風格があつて、面白かつた。師を売つた代償の銀貨三十枚を以て畑を買ひ、そこで後生安楽に暮したとなす説をK氏は、「あれ程激しい密度を以て構成されたイエスの伝道の時間のすぐ後に、こんな間延びまのびした時間が続くといふことは」、却つて造りごとだとして却けるのである。そして狂気のやうにその銀を寺院に投げつけ、何所へか立去つて縊死くわしし果てたとなす自殺説も、「余りに安易な懲悪」だとなして、K氏は採らないのである。さて、どんな結論になるのかと興味をそそり立てられながら読んで行くと、売つたものは売つたのだから、一旦師を売つたユダは、たとへ予期してなかつたにしても、師の磔刑はりつけまで平然として眺めた筈だと、K氏は結ぶのだつた。余りに冷徹ではあるが、成程、と美津子はそこに近代人の研ぎ澄まされた知性を感じ、いつものK氏への尊敬の念を一段と深めるのだつた。²³⁾

このように、主人公、美津子は、「冷徹」な「近代人の研ぎ澄まされた知性」に尊敬の念を覚える女性として描かれていることがわかる。また、作者が「汽車の中」に敢えてユダのエピソードを挟んだのはなぜであろうか。親日団体に関わり、この作品を「強要されて書」かざるをえなかつた兪鎮午は、ある意味でユダの心境であつたのかもしれない。そしてそうした状況下で、彼は何よりも「冷徹な知性」に重きを置き、そこに救いを求めようとしたのではないだろうか。

次に美津子と青年画家との会話に注目してみたい。青年が朝鮮人であることにまだ気づいていない美津子は、無邪気に質問するが、青年はまごつきながらもその質問に丁寧ていねいに答えている。

「こちらの人は唐辛子をよく食べますから」…
(中略) …「まあ……でも、そんなもの何しに沢

山食べるんでせう。こちらの人には辛くないのかしら」「そんなことはありませんよ。習慣ですね。紀行とか風土とか、そんなものの関係もありますし」…(中略)…「でもみんなずるぶん汚いお家に住んでるますわね。それで平気なのかしら。も少しきれいに出来さうなものなのに」…(中略)…「それはまあ、文化の程度が低いからだと云へませうね。第一、経済的に逼迫ひつぱくしてゐて、そんなことを考へる余地がありませんし。それに朝鮮の農家は、丁度今われわれが通つて来た釜山附近が一ばんひどいんですよ。朝鮮中どこへ行つたつて、あの附近のやうに汚くて、荒んでゐる所はないでせう。そのために内地から渡つて来る人々の第一印象がひどく悪くなるんですね。…(後略)²⁴⁾

このように作者は、青年の口を借りて、日本人の朝鮮についての率直な疑問に答えようとしているのである。そして青年に次のように語らせる。

言葉の通じない、風俗と人情の異なる所へ行けば、誰でも初めはさう思ふのですよ。言葉が分かり、風俗人情が分つてみると、朝鮮人といふものは、案外、親しみやすいものです。何よりもこの土地には古い時代から立派な文化があつたのでした。今度私は慶州といふ新羅時代しらぎの都の跡を廻つて、少しばかりスケッチをして来ましたが、それは立派なものです²⁵⁾。

このように青年は美津子に、言葉と風俗人情を理解することの大切さを訴え、朝鮮の古い文化、すなわち朝鮮の伝統的な建築の美しさについて熱弁をふるう。

「内地の建築の軒は真直まっすぐに一直線をなしてゐるのに、朝鮮と支那のは曲線をなしてゐる。…(中略)…支那の建築は如何にも尊大ぶつてゐますが、朝鮮のは非常に謙遜すなはで素直です。…(中略)…建築ばかりでなく、凡ての点で朝鮮は支那と内地の中間なのです。…(中略)…見方によつては、朝鮮は支那と内地の丁度中庸ちゅうようを行つてゐるとも云へるわけで、却つて長所だとも云へると思ふんです。…(中略)…今我国は東亜新秩序建設

のために、あらん限りの力を出して戦つてゐる。そして新しい文化を打建てやうとしてゐるのですが、その際この朝鮮の特質は必ずや何かの役に立つと思ふんです」

話してゐる中に、青年の口調はだんだん熱を帯びて来て、ひたむきな芸術家の情熱が聞く人を圧倒するのだった。隣りの乗客たちも何時の間にか話を止めて、怪訝さうな眼で青年の顔を眺めながら、どいつと耳を傾けてゐた²⁶⁾。

作者は、「東亜新秩序建設」という時局的な命題に対して、「朝鮮の伝統的文化への回帰」という方便を見い出したと言えよう。しかし「冷徹な知性」を抛り所とする作者自身は、それを「怪訝さうに眺めながら、どいつと耳を傾けてゐた」のではないだろうか。

2-3 「福男伊」

この作品が掲載された《週刊朝日》は、日本の朝日新聞社発行の週刊誌で、創刊は1922年2月である。「福男伊」は、《週刊朝日》第39巻22号(1941年5月18日号)に〈半島作家新人集〉として、李孝石の「春衣裳」、金史良の「月女」とともに掲載された。この作品のあらすじは次のようである。

鄭海用は家族だけの暮らしをしようと、母を始め寄食していた親類や下男、下女の反対を押し切って引越しを断行する。この引越しの主な目的の一つは、福男伊母子を振り切ることにあった。福男伊母子は累代、鄭家の「奴婢」だったが、主従関係の消えた今、無為徒食する彼らの存在は、海用には重荷でしかなかった。しかし海用の子供の亨植は、福男伊と遊ぶのが好きで、いくら止めてもだめだった。引越しの日も福男伊が現れると、海用夫婦は彼を追い出すのだが、翌日から福男伊は子供を路地の外の電車通りまで誘い出して遊ぶようになった。そしてある日、亨植の姿が見えなくなり、家中、大騒ぎをして探したが、見つからなかった。すると夕方になって福男伊が子供をおんぶして帰って来た。子供にせがまれて和信デパートへ行つて来たと手柄顔で語る福男伊の足を、怒った海用はステッキで強く叩いた。それを最後に福男伊は二度と海用の家に来なくなつたが、その後、海用が京城の街で福男伊を見かけると、福男伊はうれしそうに「坊ちゃまは」と

聞くのだった。

この作品の主人公・福男伊は、もともと鄭家の「奴婢」だったが、主人の屋敷を追われるという設定は、先に見た作品「夏」の主人公、尹福童と似ている。作者が日本の読者に向けて書いた作品の主人公が、ともに植民地下の朝鮮の近代化の中で、主人の屋敷を追われる下層民であるという点は注目される。ところで、先に引用した「作品解説」の中で、兪鎮午は幼少期の文学体験について次のように語っている。

私の十一、二歳の時、我家の舎廊には、絵を上手に描く親戚の老人が一人、泊まっていたが、この方が〈旧小説本〉をととても好んで、〈白露紙〉(ざら紙)に描いた絵を一束ずつ出して店に売り、金ができると毎晩、旧小説本の店から本を賃借りしてきて、私に声に出して読んでくれと催促した。我家の舎廊には、親戚の学生たちが何人もいたが、年の幼い私に読んでくれと言つたのは、私が一番、早くはっきりと読むためだった²⁷⁾。

このように、兪鎮午自身、幼い頃、多くの親戚が寄食する大家族の中に暮らしていたことがわかる。日本の植民地下での朝鮮の近代化の中で、それまでの古い大家族制度が崩れ、その過程ではじき出されていく人々の姿を作者が繰り返し描くのは、作者自身の体験にもとづく問題意識があるのかもしれない。

主人公が主人の屋敷を追われるという設定では共通している作品「夏」と「福男伊」であるが、作品全体のトーンは対照的である。作品「夏」では、土幕民となった福童が、苦しい生活の末、鄭百萬の鎌に倒れるという惨劇で終わっているのに対し、「福男伊」は、次のように滑稽に描かれている。

年はまだ十七といふのに、背ばかりひよろひよろと延びてもう五尺五六寸にもなつたらうかと思はれる大男の福男伊は、どうしたものか、ひどく子供たちになつかれるのだった。乳呑児の珠姫でさへ、この垢だらけのつぼに、ひひひと笑ひかけられるとむづかりを止めるのだから不思議だった。…(中略)…それでも小学校は四年かかつて

三年まで行つてゐるので、福男伊はよく「鳩ぼつぼ」を子供たちに歌つて聞かせたり「お月さんよ、お月さん。明るい、明るい、お月さんよ」を踊つてみせたりするのだつた。襤褸を纏つた巨漢が長い手や脚や腰をくねらせて、幼稚園の子供のやうに踊つてゐる有様は、滑稽ともグロテスクともつかぬ異様な風景だつたが、それで本人は至極真面目なのだから、いよいよ憫れるの外ない²⁸⁾。

このように福男伊は、愚かで滑稽でありながらも子供たちに好かれる不思議な力を持った青年として描かれている。そして子供を連れて和信デパートに行き、夕方になって帰って来た福男伊を海用がステッキで叩く場面では、海用も福男伊と子供との絆に心を動かされる。

海用は折れ残りのステッキを揮つて、なほも二つ三つ福男伊の脚を擲りつけた。とうとう福男伊は地べたに膝をつけて屈みこみ、痛さに堪りかねて、おいおいと声を張上げて泣き出したが、それでも背負つた子供を離さうとはしなかつた。ジーンと海用も眼頭が熱くなつたが、「馬鹿野郎」とも一つ怒鳴つてやつた。それが最後で、福南伊は二度と海用の家に来なくなつた。しかしこの京城の街を去つてしまつたのではない。今でも時折海用は街で福男伊に行き逢ふことがあるのだが、その都度彼は違つた姿をしてゐた。或時はぼんやり商店の飾り窓の中を覗き込んでゐたり、或時は屑籠を背負つたバタ屋になつてゐたり…冬の夜は鐘路の裏街で焼栗屋をやつてゐるのをみたこともあつた。…(中略)…このごろはメツセンチヤーにでもなつてゐるらしく、ついこなひだみかけた時には、ぼろぼろの自転車で乗つて、昼過ぎの総督府前の大通を悠々と走つてゐた。春の陽ひ輝いてゐる銀杏並木の黄色い若芽を呑気さうに眺めながら²⁹⁾。

これは作品の最後の部分からの引用であるが、ここにあるように、作品「福男伊」では、愚かでお人好しの福男伊は、作品「夏」の尹福童とは違って、京城の街でいろいろな仕事につきながらもたくましくのんびりと生きてゐるのである。また作品「汽車の中」で、「冷徹な知性」を拠り所としていた作者

が、その対極に位置するような福男伊のような青年を描いているのは興味深い。しかし「自転車に乗つて総督府の前の大通りを悠々と呑気さうに走る」ことのできるのは、福男伊のような男だけかもしれないという、作者の逆説のメッセージが込められてゐるとも言えよう。

2-4 「南谷先生」

この作品は、1942年1月、《国民文学》誌に掲載され、朝鮮文人協会編の『朝鮮国民文学集』(1943年4月、東都書籍株式会社)に再録された。《国民文学》誌は、1941年4月、朝鮮の文芸誌である《文章》と《人文評論》が廃刊された後、1941年11月、《人文評論》の後継誌として崔載瑞の主宰で発行された日本語による文芸誌であつた。(当初は朝鮮語版も出すことになってゐたが、結局、2回にとどまつた。)先に指摘したように、兪鎮午はこの作品について「強要されて書くものであるから、ひどく不愉快であつた」³⁰⁾と述べているのであるが、次にその内容を見ていくことにする。

秀東夫妻は、肺炎にかかった娘の瑪璃を京城では有名な漢方医の南谷先生にみてもらおうかと考える。一ヶ月前、ジフテリアで病院に担ぎ込まれたものの、気管切開された上、亡くなった姪のことを考えると、入院させることをためらつたのである。秀東が最初に南谷先生に会つたのは、彼が15歳の時、妹の猩紅熱の予後がよくないので来診を乞ひに行つた時だつた。一ヶ月ほどの南谷先生の投薬のお蔭で、妹の病状は回復していったが、ある晩、妹は食物に当たつて急死してしまう。その後、疎遠にしていたが、父を亡くし、母が脳溢血で倒れた時、秀東は18年ぶりに南谷先生を訪ねる。6年前に父親が亡くなった時、なぜ知らせなかつたのかと言ひながらも南谷先生は母の往診に来てくれるが、その晩、母は他界してしまう。翌日、南谷先生は弔問にやつてきて、昨日、処方を書かなかつたのは、病状が手に負えないことを知つていたため、すべて天命であるからと慰める。それ以来、秀東は南谷先生に礼儀を尽くす決心をしたものの、やがて欠礼をするようになり、今まで3年間、南谷先生を訪問しないのであつた。結局、娘を大学病院に入院させるが、容態はかえつて悪くなり、秀東は久しぶりに南谷先生を訪ねることになる。先生はこれまでの疎遠

をひどく怒り、秀東は娘のことを言い出せないまま帰る。その晩遅く、病院から家に戻った秀東は、雨の中、南谷先生が訪れたことを女中から知らされる。翌朝、秀東が南谷先生の家に行くと、先生は昨晩の外出のせいで病に臥せていたが、娘の瑪璃の病気のことを知ると、無理をして娘のために処方してくれる。先生の処方が効いたのか、翌日、瑪璃の熱はひき、秀東はお礼に南谷先生宅を訪れるが、先生の容態は悪化していた。子供は急速に回復し、秀東は南谷先生に感謝するが、疲れや同僚の送別会やらで、一日、見舞いに行けず、翌朝行ってみると、先生は前夜、亡くなってしまっていた。

以上が「南谷先生」のあらすじである。「偏屈なまでの潔癖家」で「孤高狷介」³¹⁾な南谷先生は、欠礼を重ねる秀東に対し、「世は澆季ぢや。礼儀は亡びたのぢや。礼儀を忘れた人間は禽獣と変りない。」³²⁾と怒鳴りながらも、秀東一家を心配し、自分が病床にあっても処方してくれるような情け深い老人である。作者はこの作品の中に、当時、すでに失われつつあった伝統的な儒教的価値観の体現者である南谷先生を描き出しているのである。

ところで、兪鎮午は「国民文学の一年を語る」という1942年に行われた座談会で、朝鮮文学について次のように語っている。

単にローカルカラーを中心にして、日本文学の埒外に立つてゐるといふやうな今までの考へ方は、これからはどうしても許されない。これからは単なるローカルカラーの地方文学であつてはならぬ。何か哲学的な新しさと、価値を持つたものでなければならぬ。さういふ意味だつたのです。良いものは生かして行く、さういふ行き方をした方がいいといふ意味で……³³⁾。

金允植氏は兪鎮午のこの発言を引用して、「兪鎮午の創作「夏」がローカルカラーに近いものだとすれば、「南谷先生」はこれを抜け出た、何か、＜哲学的な新しさ＞の模索だと言えよう。」³⁴⁾と述べているが、兪鎮午は伝統的な価値観の中に「哲学的な新しさ」を模索しようとしたわけである。一方、林鍾國氏は、すでにその先駆的な著書『親日文学論』の「兪鎮午論」の中で、作品「南谷先生」を取り上げて、次のように述べている。

近代西欧精神が没落した後の東洋の進路、いずれ一度は当面せざるをえなかった東洋文化の建設方向を、東洋的伝統である道義の精神に発見した兪鎮午は、＜国民文学＞42年1月号に『南谷先生』という伝統的な東洋的倫理観の所有者を創造したのであった。しかし、それは国民文学のための国民文学ではなかった。東洋への復帰という文学自体の本質的必然的な問題が、大東亜共栄圏樹立という時代的政治的命題と、偶然時期的に合致したことによって、そういうものも国民文学の一類型としてありえたということにすぎない。いいかえるならば、東洋への復帰という、すでにそれ以前から、ややもすると西欧文明が導入されたその最初から潜在的に内包されていたかもしれない文化自体の問題があり、東亜新秩序の建設という太平洋戦争勃発後、国際世論と国民総力を、対米戦に有利に動員するための手段として、政策的に唱導された「見目のよいカラスウリ」の役をはたしたにすぎないからであった。したがって『南谷先生』は結果的に国民文学となったのみであつて、国民文学のための国民文学たりえなかつた³⁵⁾。

兪鎮午は、作品「汽車の中」で、「東亜新秩序建設」という時局的な命題に対して、「朝鮮の伝統文化への回帰」という方便を見出し、さらにそこから哲学的なものにまで深める模索を始め、作品「南谷先生」で、伝統的な儒教的価値観の中に、「哲学的な新しさ」を見い出そうとしたと言えるだろう。そしてそれは林鍾國氏の指摘のように、「国民文学のための国民文学ではなかった」が、「東洋への復帰という文学自体の本質的必然的な問題が、大東亜共栄圏樹立という時代的政治的命題と、偶然時期的に合致したことによって、そういうものも国民文学の一類型としてありえた」というよりは、「国民文学」を書かざるをえなかつた作家が、自己矛盾することなく描くことのできたのが、「伝統的な価値観」の世界であつたと言えるのではないだろうか。

2-5 「祖父の鉄屑」

この作品は、先に取り上げた作品「汽車の中」が掲載された、国民総力朝鮮聯盟の機関誌、《国民総

力》に1944年3月に発表され³⁶⁾、『半島作家短篇集』(1944年5月、朝鮮図書出版株式会社)に再録されている。それでは兪鎮午の最後の創作であるとされる日本語小説「祖父の鉄屑」について見ていきたい。

主人公、慶一は、粗末な供え物しか準備できないながらも祖父の祭祀を執り行う。そして厳格で儉約家だった亡き祖父が集めていた鉄屑が、蜜柑箱に入ったままであることを思い出した慶一は、米英撃滅に役立つならと献納するという話である。一見、「銃後」の生活の点描とも見える作品であるが、慶一の亡き父や祖父の思い出や祭祀の場面を通して、祖先を敬う思いが描かれていることがわかる。

古風な冠をつけ、道布をまとひ、大廳に屏風をめぐらして、祭壇に黄燭をともすと、あたりは急にしんとして太古の昔に帰ったやうな気がした。…(中略)…祖先の祭祀といふものが本当に祖先の遺徳を偲ぶためのものならば、昔のお祭騒ぎよりは、今の慶一のやうに、深夜たつた一人で静かに執り行った方が却って相応はしいものやうに思はれた。ほの暗い燭光の向ふの、黒い台の上の位牌を黙つてみつめてみると、本当に祖先のみたまが音もなく降りかかつて来て、彼の魂に慈しみの言葉をささやいてくれるやうにも感じられるのであつた³⁷⁾。

これは、誰も祖父の祀りに集まって来ない中、慶一が一人、深夜に祖父の祭祀を執り行う様子を描いた場面である。「米英撃滅」を叫び、「鉄屑」までをも供出させるような極限の時代の中で、一人、静かに祖先の霊を祀る姿は、当時の作者自身の心境を投影したものではないだろうか。植民地下の朝鮮にあって、次第に追い詰められていくなかにも、「国民文学」を書かざるをえなかった作者は、しかし冷静に自らの生き延びる道を探し出しているのではないだろうか。時局的な命題に対して「朝鮮の伝統文化への回帰」から「伝統的な儒教的価値観」の世界を提示した作者は、最後に「祖先への祭祀」という儀式を通して、世俗的なものを超越した心の平安を求めているようにも思えるのである。

3. おわりに

以上、兪鎮午の日本語小説5編について検討を試みた。

まず、日本の雑誌である《文芸》と《週刊朝日》に発表され、日本の読者に向けて書かれた作品である「夏」と「福男伊」は、主人公が共に、植民地下の朝鮮の近代化の中で、主人の屋敷を追われた下層民であるという点が注目された。また、作者が「自ら進んで」書いたと述べている作品「夏」では、ルビという形で朝鮮語が表記されている点、そして作品の背景に、日本の「大陸兵站基地」としての朝鮮が描かれている点などが興味深い。

一方、朝鮮で発行された雑誌である《国民総力》と《国民文学》に掲載された作品、「汽車の中」、「南谷先生」、「祖父の鉄屑」は、掲載された雑誌の性格上、また兪鎮午自ら「強要されて書いたと述べていることから、「親日的」な作品である可能性が予想されたが、実際にそれぞれの作品の内容を見てみると、全体として「親日作品」と言えるような作品はなかった。わずかに、作品「汽車の中」で、画家である朝鮮人青年の発言にある「今我国は東亜新秩序建設のために、あらん限りの力を出して戦つてゐる。そして新しい文化を打建てやうとしてゐるのですが、その際この朝鮮の特質は、必ずや何かの役に立つと思ふんです³⁸⁾」という部分と、作品「祖父の鉄屑」で、主人公、慶一が、「いくらなんでもこの鉄屑が今頃米英撃滅に一役買つて出るとは、祖父もまさか考へなかつたに違ひない³⁹⁾」と思つた部分が、時局的な表現であると言える程度であろう。しかしそれも作品全体で見ると、これらの部分は、作者の訴えたかったテーマの表現ではなく、「国民文学」を書かざるをえなかった作者が、自らの作品を「国民文学」に見せるために、敢えて使つた表現であると考えの方が適当であろう。さらに、作品「汽車の中」で、「東亜新秩序建設」という時局的な命題に対して、「朝鮮の伝統文化への回帰」という方便を見出した作者は、作品「南谷先生」で、「伝統的な儒教的価値観」の世界を提示し、最後の日本語小説である「祖父の鉄屑」では、「祖先への祭祀」という儀式を通して、世俗的なものを超越した心の平安を求めていったと考えられるのであ

る。そしてそれは、植民地下の朝鮮にあって、「国民文学」を書かざるをえなかった作者が当時、自己矛盾することなく描くことのできた「国民文学」であったと言えよう。

最後に、本稿執筆の過程で、兪鎮午の日本語小説「かち栗」(《海を越えて》、1939年9月、PP.84~85)の存在が新たに確認されたが⁴⁰⁾、この作品は、「黄栗」(《三千里》、1936年1月、PP.277~279)を翻訳・改作したものであることが判明したため、本稿の考察対象とはしなかった。この作品については、後日、別稿を期したい。

註

- 1) 《清涼》については、布袋敏博「京城帝国大学と朝鮮人文学者——資料の整理を中心に——」(平成11~13年度科学研究費基盤研究B(1)研究成果報告書『朝鮮近代文学者と日本』、2002年2月)が詳しい。
 - 2) 兪鎮午「作品解説」『韓国短篇文学全集2 滄浪亭記』、正音社、ソウル、1972年、pp.431~432。原文は朝鮮語。以下、原文の日本語訳はすべて筆者による。なお、便宜上、直訳調とした。
 - 3) 朝鮮近代文学に関する日本語文献目録としては、大村益夫・任展慧編著『朝鮮文学関係日本語文献目録』(プリントピア、1984年)があり、これにデータが大幅に追加・補充されているものに、大村益夫・布袋敏博編『朝鮮文学関係日本語文献目録』(緑蔭書房、1997年)などがあるが、本稿では文献目録としては主に後者を参考にした。
 - 4) 兪鎮午の日本語作品に関しては、次のような論考などがある。
 - ・ 林鍾國『親日文学論』、平和出版社、ソウル、1966年
 - ・ 布袋敏博『日帝末期日本語小説研究』、ソウル大学校大学院硕士学位論文、1996年
 - ・ 金允植『韓日近代文学の関連様相新論』、ソウル大学校出版部、ソウル、2001年
 - ・ 布袋敏博「京城帝国大学と朝鮮人文学者——資料の整理を中心に——」(平成11~13年度科学研究費基盤研究B(1)研究成果報告書『朝鮮近代文学者と日本』、2002年2月)
 - ・ 金允植「国民国家の文学観からみた二重言語創作の問題——解放前における朝鮮語作家の日本語による創作について——」『朝鮮学報』第186輯、2003年1月
 - ・ 金允植『日帝末期韓国作家の日本語創作論』ソウル大学校出版部、ソウル、2003年。なお、氏はこ
- の著作の中で、兪鎮午の代表作である「金講師とT教授」について触れ、『兪鎮午短篇集』(学芸社、1939年)所収の作品を原作とし、『新韓国文学全集 兪鎮午・沈薫篇』(語文閣、1972年)所収の作品を改作として論じているが(pp.205~208)、前者は1937年2月に日本の文芸誌《文学案内》に発表された日本語訳(作者自訳)をもとに朝鮮語に書き改められたものであり、後者は初出の《新東亜》(1935年1月)版が原作である。認識に誤りがあると思われ、指摘しておくが、この点については、拙稿(本稿の註9)に表記を参照されたい。
 - 5) 前掲、兪鎮午「作品解説」pp.435~436
 - 6) 前掲、布袋敏博「京城帝国大学と朝鮮人文学者——資料の整理を中心に——」、p.62
 - 7) 「掘って立て小屋」、「穴蔵」の意。
 - 8) 前掲、金允植『韓日近代文学の関連様相新論』、p.74。(原文は朝鮮語)
 - 9) ・白川春子「兪鎮午の「金講師とT教授」について」(平成11~13年度科学研究費基盤研究B(1)研究成果報告書『朝鮮近代文学者と日本』、2002年2月)・白川春子「兪鎮午作「金講師とT教授」小考——T教授とその他の登場人物を中心に——」(『下関市立大学論集』第47巻第3号、2004年1月)
 - 10) 前掲、白川春子「兪鎮午の「金講師とT教授」について」、pp.82~84
 - 11) 兪鎮午「夏」《文芸》、1940年7月、p.67。[原文の漢字は旧字体であるが、本稿では便宜上、概ね略字体に直した。また、旧仮名遣い等についても一部、改めた。以下同じ]
 - 12) 同上、pp.82~83
 - 13) 同上、p.85
 - 14) 同上、p.87
 - 15) 前掲、金允植『韓日近代文学の関連様相新論』、p.76。(原文は朝鮮語)
 - 16) 『近代朝鮮文学日本語作品集(1939~1945)創作篇』解説、大村益夫・布袋敏博編『近代朝鮮文学日本語作品集(1939~1945)創作篇6』、緑蔭書房、2001年、p.457。前掲、布袋敏博『日帝末期日本語小説研究』、p.64
 - 17) 前掲、林鍾國『親日文学論』、pp.96~97
 - 18) 同上、p.104
 - 19) 同上、p.113
 - 20) 同上、pp.149~150
 - 21) 前掲、兪鎮午「作品解説」、p.436。原文は朝鮮語。
 - 22) 兪鎮午「汽車の中」《国民総力》、1941年1月、p.125
 - 23) 同上、pp.125~126
 - 24) 同上、p.127
 - 25) 同上、p.128
 - 26) 同上、pp.128~129

- 27) 前掲、兪鎮午「作品解説」、p.430. 原文は朝鮮語。
- 28) 兪鎮午「福男伊」《週刊朝日》、1941年5月18日。
『近代朝鮮文学日本語作品集（1939～1945）創作篇3』、緑蔭書房、2001年、p.368
- 29) 同上、p.370
- 30) 註21)参照
- 31) 兪鎮午「南谷先生」《国民文学》、1942年1月、
p.200
- 32) 同上、p.209
- 33) 《国民文学》、1942年11月、p.93
- 34) 前掲、金允植「国民国家の文学観からみた二重言語創作の問題——解放前における朝鮮語作家の日本語による創作について——」、p.48
- 35) 前掲、林鍾國『親日文学論』、pp.275～276. なお、引用は大村益夫訳（高麗書林、1976年、pp.268～269）に依った。
- 36) 前掲、大村益夫・布袋敏博篇『朝鮮文学関係日本語文献目録』、p.241参照。なお、《国民総力》1944年3月号については現物にあたれなかったため、『半島作家短篇集』所収の「祖父の鉄屑」を参照し、引用もこれに依った。
- 37) 兪鎮午「祖父の鉄屑」『半島作家短篇集』、朝鮮図書出版株式会社、京城、pp.116～117
- 38) 前掲、兪鎮午「汽車の中」、p.129
- 39) 前掲、兪鎮午「祖父の鉄屑」、pp.119～120
- 40) 布袋敏博氏は、2005年度第2回朝鮮語文化研究会（2005年7月24日、於：早稲田大学）で、「日本語作品の資料について——1998年以降の再発掘資料を中心に——」と題して発表し、『朝鮮文学関係日本語文献目録』（緑蔭書房）未収録の主な日本語作品関連資料として、未確認ではあるが「⑦兪鎮午「かち栗」『海の』（1939.9.）」（レジュメの記載による）と報告している。また、今回の作品「かち栗」の確認にあたっては、佐賀大学の永島広紀氏の資料協力を得たことを記しておく。